日本古代通史・連載第 28 回

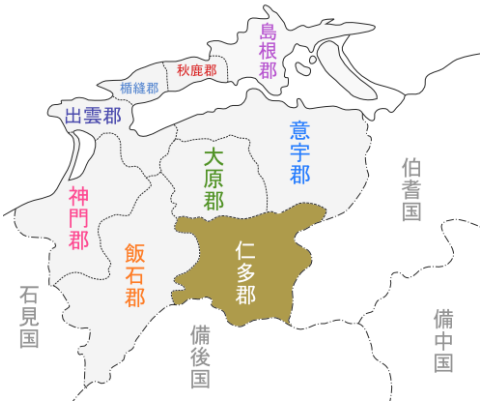
後期・邪馬台国の時代⑦
～スサノオとクシナダヒメ～

河村哲夫

奥出雲

斐伊川の上流域を「奥出雲」という。

下図のとおり、現在の仁多郡奥出雲町の領域にほぼ重なる。



出雲国の九郡

島根県東部の市町

天平 5 年(733)成立の『出雲国風土記』には、

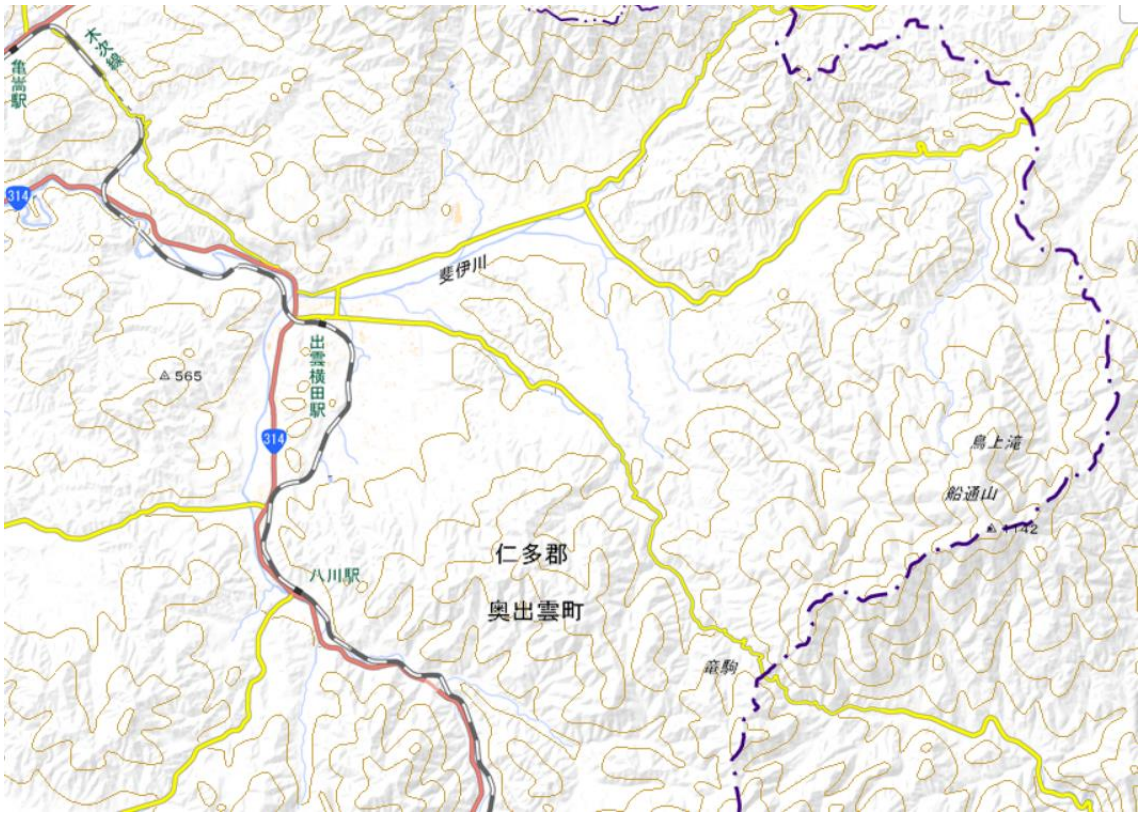
「出雲の大川(斐伊川)――源は伯耆と出雲の国の堺の鳥上山より出て、流れて仁多郡の横田の村に出る。横田、三処、三沢、布施の四つの郷を経て、大原郡の堺の引沼村に出る。来次(きすき)、斐伊、屋代、神原の四つの郷を経て、出雲郡の堺の多義村に出る。河内、出雲の二つの郷を経て、北に流れ、さらに西に折れて、伊勢、杵築の二郷を経て、神門水海(かむどのみずうみ)に入る。いわゆる斐伊の川下なり」

と、仁多郡内に 4 つの郷があったと記されている。

郷　名	現　在　地
横田郷	奥出雲町横田、大呂、中村、竹崎、稲原、下横田、八川
三処郷	奥出雲町上三所、三所、郡、高田、亀嵩 安来市広瀬町西比田
三沢郷	奥出雲町鴨倉、三沢、三成、河内、高尾、大谷、上阿井、下阿井、大馬木、小馬木 雲南市木次町湯村、平田
布勢郷	奥出雲町八代、佐白、馬馳 雲南市木次町北原

スサノオと五十猛命らは、『出雲国風土記』の逆のコースをたどって、川下の神門水海（かむどのみずうみ）から斐伊川を上って、奥出雲の仁多郡の地に足を踏み入れた。

下図の左上、亀嵩という地名に聞き覚えのある方もおられよう。松本清張の『砂の器』の舞台になった場所である。緒形拳扮する駐在さんが勤めていた場所である。「かめだか」ではなく、「かめだけ」とズーズー弁のようになまって読む。このことから、出雲の亀嵩が犯人への重要な手がかりとなる。筆者も若いころ原作を読み、映画を観て感動した者の一人である。



すでに述べたとおり、『古事記』は、

「かれ避追(やらは)えて＜かぐて追放されて＞、出雲の国の肥の河上、名は鳥髪といふ地(ところ)に降(あも)りましき」

と記し、『日本書紀』も、

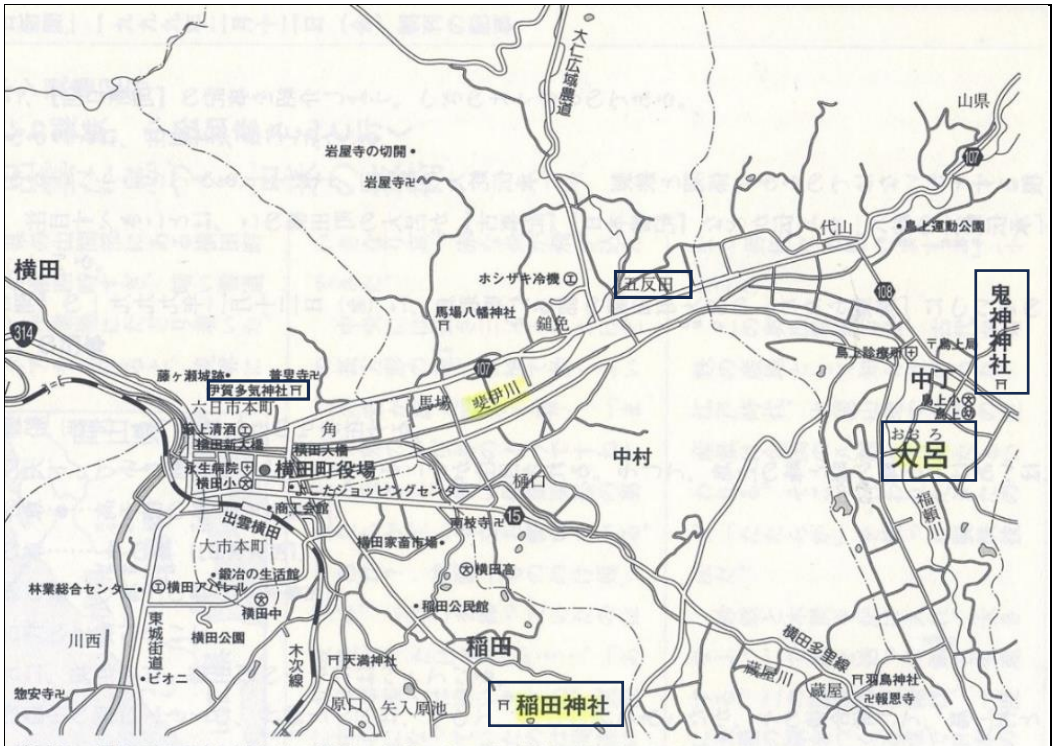
「素戔嗚尊(スサノオ)、天より出雲国の簸(ひ)の川上に降到(いた)ります」

と書く。

天降った山は、【鳥髪(古事記)＝鳥上(日本書紀)＝船通山】である。

船通山は、標高 1,142 メートルの 360° の眺望に恵まれた山で、島根県仁多郡奥出雲町と鳥取県日野郡日南町の県境に位置している。スサノオは、鳥髪山(船通山)に登って、これから支配することになる出雲国と伯耆国の国見を行ったにちがいない。

スサノオ関連の伝承が、斐伊川上流、鳥髪山麓の奥出雲――旧横田町に残されている。



地図17　須佐の男の命に関係する遺跡・伝承のある地（『島根県都市地図』昭文社刊にもとづき作成）

伊賀多気神社(仁多郡奥出雲町横田 128)

スサノオが子の五十猛命を率いて到着した場所という。

『延喜式神名帳』に「伊我多気神社」と記され、『出雲国風土記』には「伊我多気社」と記されている。

五十猛命を主祭神として、スサノオと大己貴命(大国主命)を祭っている。

戦国時代の兵火により焼失し、天文20年(1551)に横田郷を支配した尼子氏の代官森脇家真と五反田屋によって現在地に再建されたという。江戸時代には五十猛神社と呼ばれたらしい。

焼失前の鎮座地は、現在地より１キロ程度上流の五反田あたりであったという。

鬼神(おにかみ)神社(仁多郡奥出雲町大呂2058-2)

これまた延喜式内社の「伊我多気神社」の論社とされ、上宮伊賀多気神社とも称される。

五十猛命を主祭神として、スサノオを祭り、背後地は五十猛命の陵墓とも伝わる。

この神社が所在する字名は、大呂(おおろ)である。スサノオが退治した八岐大蛇(ヤマタノオロチ)に由来するという。

何ゆえ、スサノオと五十猛命はこの地にやってきたのか。

『古事記』には、次のように書かれている。

「出雲の国の肥の河上、名は鳥髪といふ地(ところ)に降(あも)りましき。この時に、箸その河ゆ流れ下りき」

すなわち、斐伊川の上流から箸が流れてきたという。

「ここに、スサノオの命は、その河上に人ありと思ほして、まぎ上り往でまししかば、老夫(おきな)と老女(おみな)と二人ありて、童女(おとめ)を中に置いて泣く」

老夫婦は国つ神であるアシナヅチとテナヅチで、娘はクシナダヒメ(櫛名田比売・奇稲田姫)といった。

スサノオが老夫婦に泣いている理由を尋ねると、老父は、

「私たちには八人の娘がいましたが、毎年、山からヤマタノオロチが降りやって来て娘を一人ずつ食べていったのです。今年もヤマタノオロチが来る時期になり、最後に残ったクシナダヒメも食べられてしまいます。それが悲しくて泣いているのでございます」

と答えた。

老父アシナヅチによれば、その大蛇は一つの胴体に八つの頭と八つの尾をもち、目はホオズキのように真っ赤で、しかも身体中にヒノキやスギが生え、カヅラが生い茂り、八つの谷と八つの丘にまたがるほど巨大で、腹のあたりにはいつも血が滲んでいるという。

話を聞いたスサノオは、老夫婦に、クシナダヒメとの結婚を条件にヤマタノオロチを退治することにした。

スサノオが天照大神の弟で、高天原からやってきたばかりであることを知った老夫婦は、大喜びでこの申し出を承諾した。

スサノオは、クシナダヒメの安全を守るため、彼女を爪形の櫛(くし)に変えて自分の髪にさした。

そして老夫婦に対して、

(一)家のまわりに垣根を張り巡らせること

(二)その垣根に八つの門を設けること

(三)門ごとに八つの桟敷(さじき)を作ること

(四)八つの桟敷に強い酒を満たした桶を置くこと

という指示を出した。

こうして準備が整い、待ち構えていると、すさまじい地響きとともにヤマタノオロチが現われた。

芳醇な香りが漂う酒を見つけたヤマタノオロチは八つの桶にそれぞれ頭を突っ込んで酒を飲み始めた。やがてすべての酒を飲み干してしまうと、ヤマタノオロチは酔っぱらって、眠り込んでしまった。『日本書紀』神代第三の一書には、「毒の入った酒を飲ませた」とある。

眠り込んだヤマタノオロチを見て、スサノオは腰に差している剣を抜き放った。この剣のことについては後述する。

スサノオはヤマタノオロチに斬りかかり、身体を刻み始めた。そして刃がその尾に達し、切り開いたとき中から大刀が出てきた。そこでこの大刀を天照大神に献上した。これが、「都牟刈(つむがりの)大刀」――「草薙(くさなぎ)の剣」である。皇室の三種の神器の一つとなった。

以上が、スサノオのヤマタノオロチ退治についての『古事記』のあらましである。

アシナヅチ・テナヅチ老夫婦とクシナダヒメ

文　献	アシナヅチ	テナヅチ	クシナダヒメ
『古事記』	足名椎命	手名椎命	櫛名田比売
『日本書紀』	脚摩乳	手摩乳	奇稲田姫 稲田媛 真髪觸奇稲田媛(まかみふるくしいなだひめ)
『出雲国風土記』			久志伊奈太美等与麻奴良比売命 (くしいなだみとよまぬらひめ)
備　考	「ナヅ」は「撫づ」		「クシ」は「櫛(くし)」

アシナヅチとテナヅチ老夫婦に共通の「ナヅ」は「撫づ」のことであり、父母が娘の手足を撫でて慈しむ様子を表すとする説(『日本書紀(一)』岩波書店注三)が通説的な見解のようであるが、どういうわけか古代史の世界では突飛な説を唱える人が少なくない。

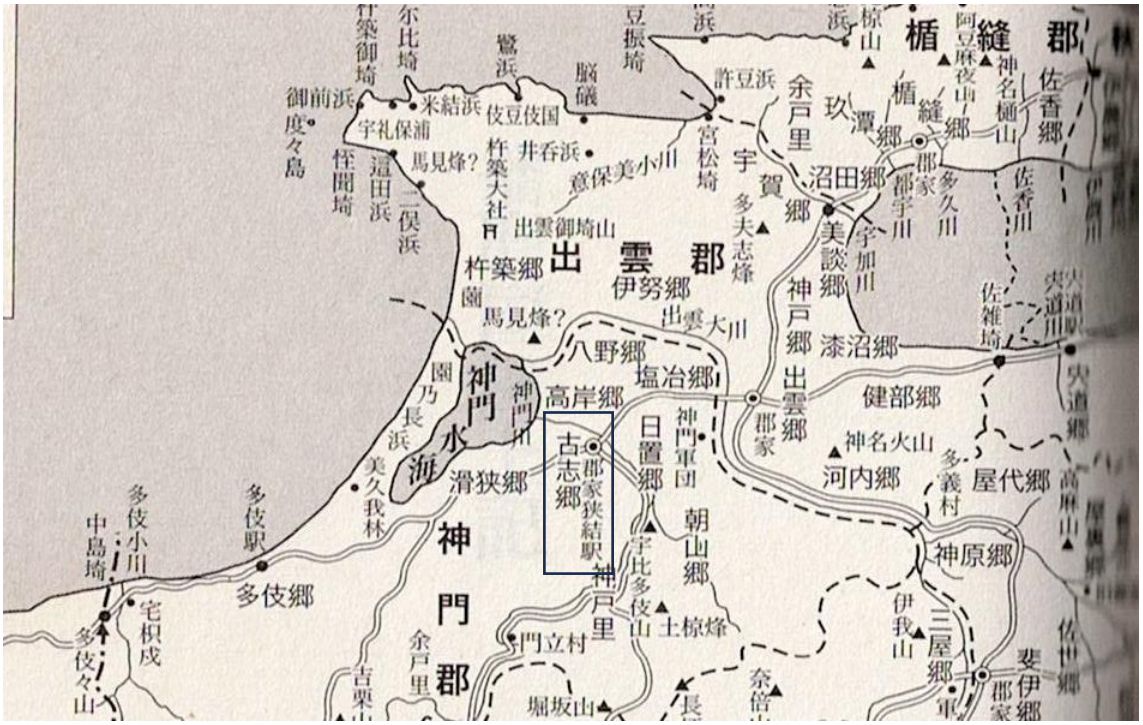
古田武彦氏のアシナヅチを浙江省出身の「港の神」とする説(『盗まれた神話』)や、YouTubeなどで盛んに発信しておられる田中英道氏の足や手が長いユダヤ系の人物などとする説はその代表といえようか。

最近、倉山満氏の『嘘だらけの古代史』(扶桑社)に感銘を受けたが、そのなかに、
「SF になりそうになったら常識に返る」
というごく当たり前の基本的姿勢が記されている。
筆者もまた、本連載について、
「小説になりそうになったら我に返る」
ということを基本に書き進めているつもりである。
それでも、ついつい空想の世界に足を踏み入れてしまうことがある。
また、倉山満氏は、古代史の基本的姿勢として、
「本当のことはわからないので仮説の積み重ね」
とも記されている。
そういう観点からいえば、スサノオのヤマタノオロチ伝説についても、長期にわたり口承口伝によって継承された結果、内容が大きく誇張されてしまったのではないか――と考えている。
一つの胴体に八つの頭と八つの尾をもった大蛇など、この世に存在するわけがないからである。
やはり、常識の世界に立ち返って、誇張された部分を剥ぎ落とし、その中核に潜む歴史的事実を突き止めなければならない――これが基本である。

越(高志)のヤマタノオロチ

神が人であるならば、ヤマタノオロチもまた人のはずである。
『古事記』には「高志の八俣遠呂智」と表記されている。
【高志＝越】は、現在の上越地方から北陸にかけての一帯のことである。
これが重要な手がかりになる。
『出雲国風土記』の「神門(かんど)郡」の条には、
「イザナミの時、日淵川【現在の保知石(ふちし)川】を以て池を築造(つく)りき。その時、古志(越)の国人等(くにひとら)、到り来て堤を為(つく)り、宿り居し所なり。故、古志と云ひき」
と、古志（北陸）の人々が池を築くため出雲に寄留していたことから、「古志郷(こしのさと)」と呼ばれるようになったと記されている。現在の神戸川下流域の出雲市古志(こし)町付近である。
また、おなじ神門郡の「狭結駅(さようのうまや)」のくだりでは、
「神門郡家と同じ所にある。古志の国の佐与布（さよう）という人が来て住んでいた。だから、最邑（さよう）という。神亀三年(726)に字を狭結と改めた。この人が来て住んだわけは、古志郷の説明に同じ」
とも記されている。
これらの記事からみて、堤防工事や古墳築造工事などのため、越の国から出雲に出稼ぎやってきた現場作業員――労働者たちがいたことは明らかである。
そのことを裏づけるように、2 世紀後半ごろとみられる西谷3号墓からは、丹後・但馬から北陸（越）系統の「丹越(たんえつ)土器」が出土している(「いまどき島根の歴史・『出雲国風土記』の移住伝承から」島根県古代文化センター長池淵俊一)

つまり、遠く離れた出雲と越の間で、イザナミの時代から人的交流があったことになる。



古志郷と狭結駅

出雲市古志町

西谷3号墓出土の丹越土器

誘拐婚(略奪婚)

日本においては、伝統的に動物名を名字あるいは名に用いる例が多い。

名字でいえば、馬(馬場、相馬、有馬、馬渕、馬渡、美馬、馬飼など)・熊(熊田、熊谷、熊沢、大熊、熊本、熊切など)・猪(猪原、猪股など)・鹿(鹿野、鹿島など)・鶴(鶴岡、鶴見、鶴丸、鶴田、鶴谷など)・貝(細貝・須貝・磯貝・貝塚・貝沼など)・蟹・烏賊・鴎・蛸・蜂・兎・蛙・蚊・狼・象・犀・鮎・鮒・鯰江・鯖などの動物が使われている。

名でいえば、四国の高知県で今でも動物名をよく用いる地域があるが、かつての日本では熊(落語の熊五郎など)・猿・烏・龍・虎・烏(鷹、鴻)・馬(駿、篤、駆、駒、駕、騎)・羊(美、翔、祥、義、儀、洋、達、善など)・猪(猪一郎など)など、当たり前のように用いられた。

『日本書紀』でも、思いつくだけでも、次のような例がみられる。

天の岩戸の段	天日鷲命・猿女君
天孫降臨の段	猿田彦
神武天皇紀	八咫烏
仲哀天皇紀	熊鰐・中臣烏賊津
神功皇后紀	羽白熊鷲
仁徳天皇紀	平群木菟
欽明天皇紀	巨勢猿
皇極天皇紀	土師猪手・蘇我馬子・蘇我入鹿
斉明天皇紀	物部熊
天智天皇紀	河内鯨
天武天皇紀	廬井鯨・置始菟・大伴馬来田

したがって、大蛇(オロチ)といって驚くことはない。八つの頭と八つの尾など、伝承の過程で大きく誇張された姿に過ぎない。

『古事記』に「高志(越)の八俣遠呂智(ヤマタノオロチ)、年毎に来たり」と書かれているとおり、毎

年、越の国の男どもが出雲にやってきて女性を略奪していたのであろう。

いわゆる誘拐婚(Bride kidnapping, Bride abduction)である。略奪婚(掠奪婚)ともいう。

もちろん、現在では女性への重大な人権侵害とされているが、古い時代の日本では全国各地でみられた風習であった。

そもそも「娶(めと)る」と「女捕(めと)る」は同義語である。

平安時代	・源俊房と娟子内親王の拉致婚(『今鏡』) ・訴訟のために上洛していた常陸掾の平維幹が、高階成順の長女・大姫御前を盗み、常陸国に連れていった(『宇治拾遺物語』)。
鎌倉・室町時代	・物くさ太郎が京都の清水寺前で辻取り(女性の拉致)を行った(『御伽草子』)。

なお、民俗学者の柳田國男の『故郷七十年』などによると、全国各地の誘拐婚の風習は次のとおりとされている(アンダーライン部分は筆者による補足)。

ボオタ	・女性が夕方着飾って男性を待ち、男性は女性を連れていく。この際「ボオタ、ボオタ」と大声で叫ぶ。 ・<u>ボオタ＝もろ(貰)た？</u>	明治初期の大阪の木津、難波、今宮など。 九州の長崎や博多など。
かたぐ(担ぐ)	・両親の承諾が得られない結婚への対抗手段	高知県大豊町など
寝連(ねつ)れ	・同上 ・<u>駆け落ち</u>	長野県など
おっとい嫁じょ (オツトリ嫁)	・同上 ・<u>おっとい＝オットリ＝盗み</u>	鹿児島県大隅半島など

なお、このような誘拐婚ないし略奪婚は、日本に限らず、世界的な風習であった。

代表的な例を紹介すれば、次のとおり。

ギリシャ神話	**ハデスによる誘拐婚**	ギリシャ神話の大地を司る女神ペルセポネは冥府の神ハデスに誘拐されて妻となり、冥界の女王とも呼ばれた(『ギリシャ神話』)。
古代ローマ	**サビニ人女性の略奪婚**	ローマ建国時は女性が少なかったため、近隣のサビニの女性を略奪した。サビニは女性たちを奪回するためにローマと戦争を起こしたが、サビニの女性たちは子供と引き離されることを拒み、戦争の中止を懇願したという(『ローマ建国史』)。
古代ヨーロッパ	**父親からの略奪婚**	古代ヨーロッパでは父親を倒し、娘をさらう男性が賞賛されたという(滝澤聡子 2005)。
中世ユーラシア	**戦利品としての略奪婚**	・モンゴルなど騎馬民族の略奪婚(『元朝秘史』) ・イスラム教における戦利品（クルアーン）
アフリカ大陸	**誘拐婚の風習**	エチオピアなどでは現在でも誘拐婚の比率が圧倒的に高いという。

スサノオはクシナダヒメを守るため、実際のところは、安全な場所に避難させたうえで(八重垣神社の奥の院の「佐久佐女の森」に隠したとも伝わる)、集落を頑丈な柵などで固め、毒入りの酒を準備して待ち受けたのであろう。

やがて、8 人ないし 8 グループの越の国の男どもが襲撃してきたが、酒樽を見つけて飲み始め、たちまち酔っぱらい、あっけなくスサノオらに退治されてしまった。――これが現実的な解釈であろう。

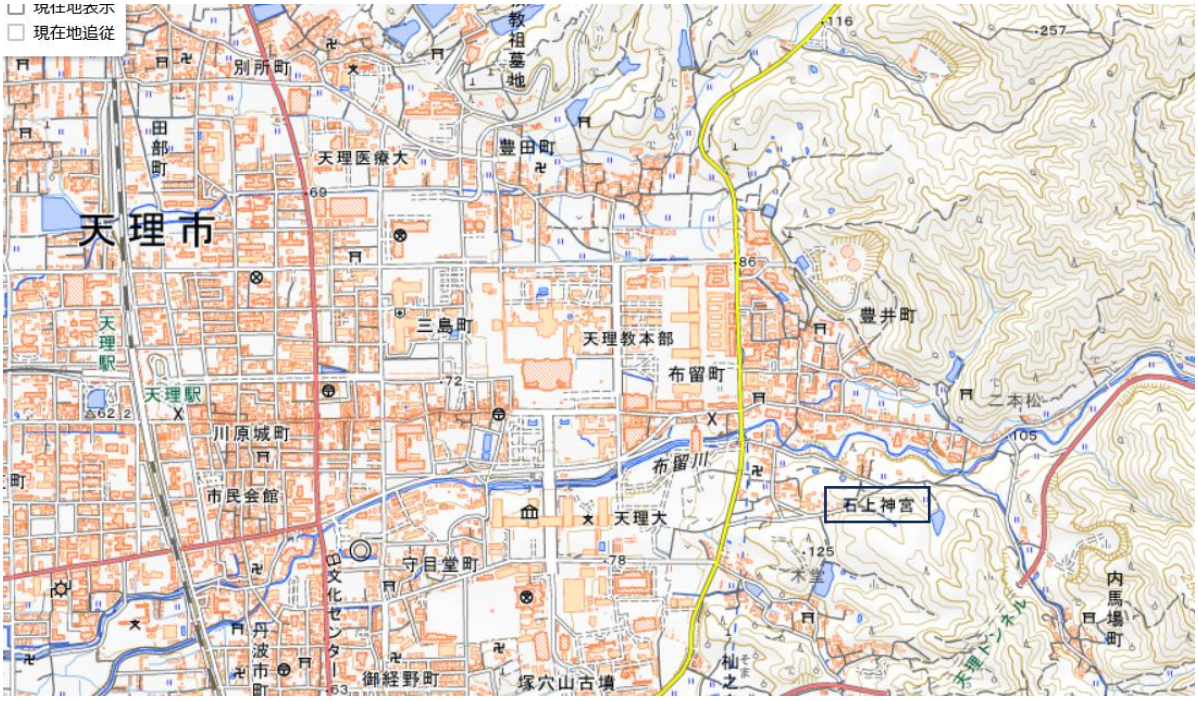
ヤマタノオロチを斬った剣――十握剣

まず、スサノオがヤマタノオロチを斬った剣である。

『日本書紀』第三の一書には、「今吉備の神部(かむとも・神主)のところに在す。出雲の簸の川上の山是なり」と書かれ、現在の石上布都魂神社(備前国赤坂郡・岡山県赤磐市石上字風呂谷)の地とみられているが、後段の「出雲の簸の川上の山是なり」という一文は何らかの誤伝であろう。

石上神宮(奈良県天理市布留町)に伝わる『石上神宮旧記』には、十握剣はもと吉備の石山の地にあったが、仁徳天皇の時代に石上神宮に移したとある。

下表のとおり、この剣については『日本書紀』『古事記』などにも記され、明治 7(1874)に管政友が石上神宮の禁足地から発掘した素環頭の鉄刀が十握剣として祭られている。



ヤマタノオロチを斬った剣		
『日本書紀』本文	十握剣	「尾に至りて剣の刃少しき欠けぬ」
『日本書紀』第二の一書	蛇の麁正(おろちのあらまさ)	「尾を斬る時に至りて剣の刃少し欠けたり」 「今石上(いそのかみ)に在(ま)す」
『日本書紀』第三の一書	蛇(おろち)の韓鋤(からさひ)の剣	「剣の刃少しき欠けたり」 「今吉備の神部(かむとも・神主)のところに在す。出雲の簸の川上の山是なり」 →石上布都魂神社(備前国赤坂郡・岡山県赤磐市石上字風呂谷)
『日本書紀』第四の一書	天蠅斫剣(あめのははきり)	「尾を斬りて刃欠けぬ」
『古事記』	十拳剣	「尾を切りたまふ時に御刀の刃毀(か)けき」
『古語拾遺』	天十握剣・天羽々斬	「今、石上神宮に在り」 「大蛇を羽々と謂ふ」

親指を除いた指 4 本分の幅を 1 握(つか)といい、「拳」・「掬」・「束」などとも表記される。

十握剣(十拳剣・天十握剣)というのは、その 10 倍の長さ――握りこぶし 10 個分の幅という意味である。

『日本書紀』(岩波書店)の注には、「一握は、小指から人差指までの幅、八センチメートルから十センチメートル。従って十握剣は、八〇センチから一〇〇センチの剣」と書かれている。

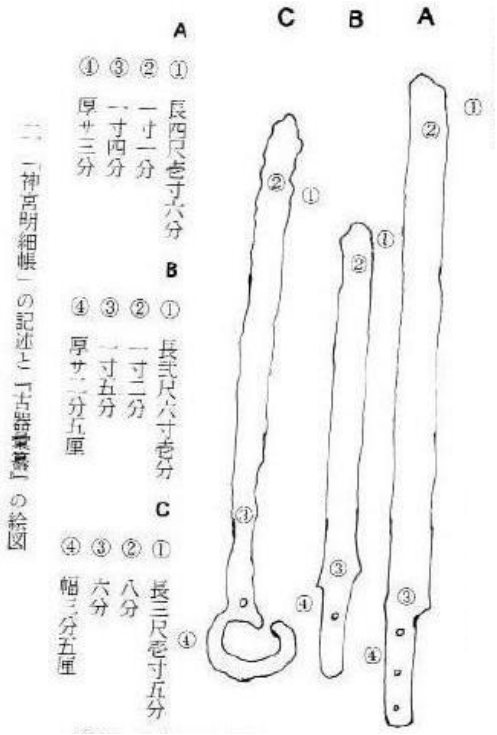
発掘年	剣　名	長さ	幅	形	備　考
明治 7 (1874)	内反素環頭大刀	2 尺 8 寸 6 分 (85.8 cm)	1 寸 1 分 (3.3 cm)	内反り	菅政友が禁足地から発掘 布都斯魂剣(ふつしみたまのつるぎ)、別名、天羽々斬剣とみられる。
明治 11 (1878)	A.金象嵌大刀	4 尺 1 寸 6 分 (126.05 cm)	1 寸 2 分 (3.6 cm)	片刃直刀	
	B.鉄剣	2 尺 6 寸 1 分 (78.3 cm)	1 寸 2 分 (3.6 cm)	両刃直刀	
	C.素環頭大刀	3 尺 1 寸 5 分 (95.5 cm)	8 分 (2.4 cm)	内反り	・布都御魂剣(師霊剣) (ふつのみたまのつるぎ) ・建御雷が大国主命に国譲りを迫った剣とみられる。 ・高倉下→神武天皇

※季刊「古代史ネット」9 号に掲載された石合六郎氏作成の表より一部抜粋・修正

明治 7 年(1874)出土

布都斯魂剣(ふつしみたまのつるぎ)
(天羽々斬剣)

明治 11 年(1878)出土



C・・布都御魂剣(ふつのみたまのつるぎ)
(師霊剣)

石合六郎氏が『素戔嗚の剣(下)――どんな形だったか？』(季刊「古代史ネット」第 13 号)において論じられているように、明治 7(1874)に管政友が石上神宮の禁足地から発掘した 2 尺 8 寸 6 分(85.8 ㎝)の内反素環頭大刀がスサノオの十握剣の有力候補とみられるが、いまだ全面決着とは言い難く、出土したすべての鉄剣の精密な鑑定が望まれるところである。

ヤマタノオロチの尾から出た剣――草薙剣

次に、ヤマタノオロチの尾から出てきた剣である。

現在、熱田神宮(愛知県名古屋市熱田区神宮 1 丁目)に祭られている。

スサノオは、ヤマタノオロチから奪ったこの剣を高天原の天照大神に献上した。もちろん姉の天照大神は天の岩戸で亡くなっているから、後継者の万幡豊秋津師比売命およびその後見人の高皇産霊神(高木神)に贈呈したのであろう。

その後、ニニギノミコトの天孫降臨に際して他の神器とともにニニギノミコトに渡され、神武天皇に引き継がれた。

崇神天皇の時代になって、八咫鏡と天叢雲剣の形代(みとしろ・レプリカ)が造られ、本来の八咫鏡と天叢雲剣は笠縫宮を経由して、伊勢神宮に移された。したがって、宮中に残されたのは八咫鏡と天叢雲剣のレプリカであった。

やがて、天叢雲剣は伊勢神宮の斎宮であった倭姫命から東征に向かうヤマトタケルに渡され、焼津において草を薙ぎ払って身を守ったことから草薙剣と呼ばれるようになり、東征からの帰途、尾張一族の宮簀媛に預けたまま死去してしまったため、尾張氏によって守られ、現在熱田神宮のご神体として祭られている。

一方で、宮中の三種の神器の形代――レプリカは、源平の時代、西国に逃れた平家一門と運命を共にし、安徳天皇とともに壇ノ浦で海中に沈んでしまった。

神璽と神鏡は回収できたものの神剣は失われたため、伊勢神宮から献上された剣を天叢雲剣としたという噂話もある。もちろん公式発表などなく、真偽不明のままである。

いずれにしても、本来の三種の神器のうち、八咫鏡は伊勢神宮、天叢雲剣(草薙剣)は熱田神宮、八尺瓊勾玉は宮中に存することになるが、実物はまったく公開されていない。

なお、八咫鏡については、季刊「古代史ネット」創刊号の「天照大御神の鏡」のなかで、福岡県糸島市の平原遺跡から出土した大型鏡 5 面が八咫鏡であることを詳しく論じているので参照されたい。

草薙剣について、『日本書紀』『古事記』などには、次のとおり記されている。

ヤマタノオロチの尾から出た剣		
『日本書紀』本文	草薙剣・天叢雲剣	「天神(天照大神)に上献(たてまつるあ)ぐ」
『日本書紀』第二の一書	草薙剣	「草薙剣は尾張国の吾湯市村に在す。熱田の祝部の掌りまつる神是なり」
『日本書紀』第三の一書	草薙剣	「今は尾張国に在り」
『日本書紀』第四の一書	草薙剣	「五世の孫天之葺根神を遣(まだ)して天に上奉(たてまつりあ)ぐ」
『古事記』	都牟刈の大刀 草那芸之大刀	「天照大御神に曰し上げたまひき」
『古語拾遺』	天叢雲 草薙剣	「大蛇の上に雲気有り」 「天神に献上(たてまつ)りたまふ」
熱田神宮	草薙神剣	ヤマトタケルから宮簀媛が預かる。

スサノオがヤマタノオロチを退治した十握剣ではなく、ヤマタノオロチの尾から出てきた(おそらく奪った) 天叢雲剣(草薙剣)が天皇家の三種の神器となったことは、不思議といえば不思議な話である。

江戸時代に熱田神宮の関係者らは、その草薙剣を実際に見たらしい。東京帝国大学巨樹栗田寛の『神器考証』(1897)に、次のように書かれている。

「長さ五尺(1.5m)の木の箱のなかに石の箱があり、赤土が詰めてある。(石の)箱のなかにクスノキの内側をくり抜いてなかに黄金を敷いてその上にご神体(草薙剣)を置いていた」

「ご神体(草薙剣)の長さは二尺七～八寸(81～84 ㎝)ばかり、刃先は菖蒲(しょうぶ)の葉なりにして、中ほどはむくりと厚みあり。本(柄)の方は六寸(18 ㎝)ばかりは筋立ちて魚などの背骨の如し。色は全体に白し」

安本美典氏の『邪馬台国と出雲神話』(勉誠出版)のなかで、明治大学教授であった後藤守一氏が『日本古代史の考古学的検討』のなかで、

・「刃先は菖蒲(しょうぶ)の葉」というのは「両刃の剣」ということである。

・「魚などの背骨の如し」というのは「有柄式銅剣」のことである。

・「色は全体に白し」というのは「白色銅」のことである。

と指摘されていることを紹介されている。

1．佐賀県唐津市柏崎遺跡出土　長さ46.5cm
2．福岡県前原市三雲遺跡出土　長さ51.5cm
3．山口県大津油谷町尚津具出土長さ44.0cm
4．佐賀県神埼郡神埼町・三田川吉野ケ里遺跡44.5cm
5．朝鮮の有柄式鉄剣　慶尚南道良洞里出土（東義大学博物館）

安本美典氏自身は鉄剣の可能性についても言及されているが、いずれにしても、現物を鑑定しないままの推測に基づくものであり、いつの日かの科学的な鑑定を期待するしかない。

本稿もこれ以上つづけると空想の世界に突入してしまうので、このテーマについてはこの辺で終わりにしたいとおもう。

ただし、何ゆえ越の国の人たちがこのような有柄式銅剣を有していたのか、という問題について一言付け加えておきたい。

それは、九州から出雲・北陸に至る日本海側の人々の交流が、予想外の厚みと広がりを有していたからではないか――と考えている。

次の大国主命の時代において述べることとしているが、出雲の支配領域は北部九州の邪馬台国連合よりもはるかに広大であった。

その支配領域は、瀬戸内海側の吉備・四国地方から畿内に及び、日本海側では石川・富山・新潟など北陸地方に及んでいた。

ということは、北陸地方の側からみれば、出雲を通じて九州および大陸文化を吸収し、北海道方面からはオホーツク文化を吸収できる地域に位置していたということになる。

越のヤマタノオロチが、東西いずれかのルートから三種の神器のひとつとなる剣を入手していたとしても何の不思議はない。

クシナダヒメ

奥出雲町横田には、クシナダヒメを祭る稲田神社があり、神社のまわりには、クシナダヒメの「産湯の池」やクシナダヒメのへその緒を切ったとされる竹を祭る「笹の宮」などもある。

産湯の池

笹の宮

出雲におけるスサノオゆかりの地

スサノオは、ヤマタノオロチ退治後、クシナダヒメを妻とした。

そして、須賀（すが）の地へ行き、この地が大いに気に入ったスサノオは、

「我が御心すがすがし」

といって、須賀宮を造ったという。現在の**須我神社**(雲南市大東町須賀)である。

そして、雲が立ちのぼるようす見て、

「八雲立つ　出雲八重垣　妻籠に　八重垣作る　その八重垣を」

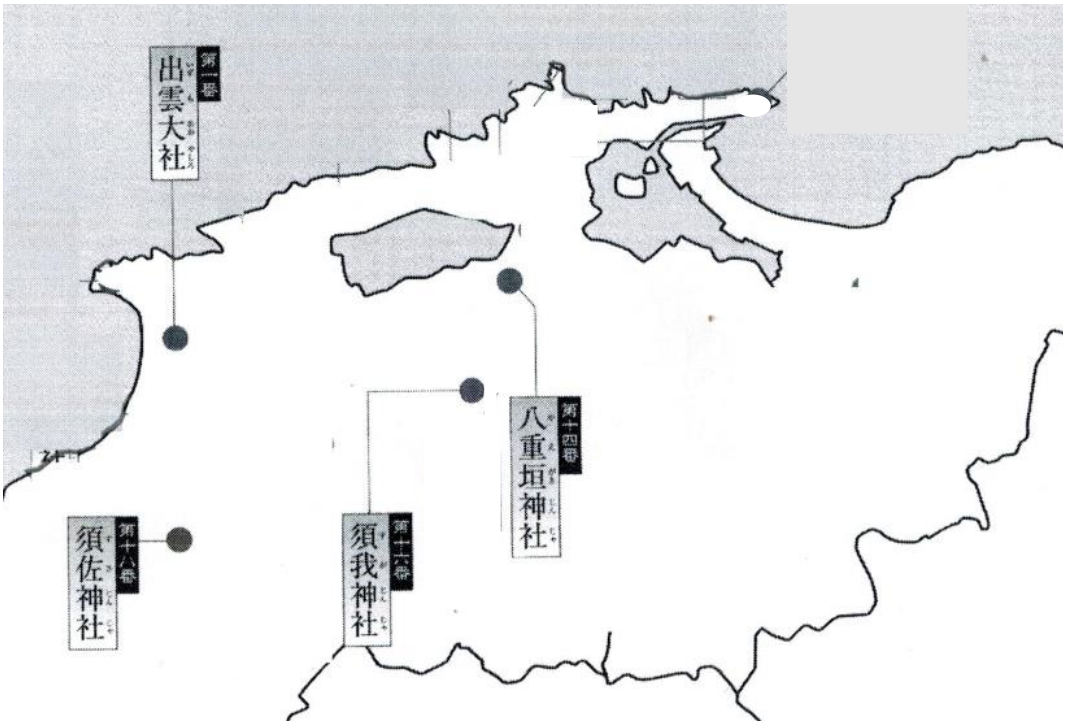
（盛んに雲が沸き起こる。まるで八重垣のようだ。新妻を守るために八重垣が沸き起こる。なんと素晴らしい八重垣か）

という歌を詠んだ。「和歌発祥の地」とされ、須我神社の境内には「八雲立つ」の歌碑が建てられている。

ちなみに、須我神社から約2キロ北東にある八雲山中腹には巨岩の磐座があり、奥宮として祭られている。

八重垣神社(松江市佐草町)は、このスサノオの「八雲立つ」の歌にちなむ縁結びで知られる神社で、祭神はスサノオとクシナダヒメである。前述したとおり、ヤマタノオロチ退治の時に、クシナダヒメをこの神社の奥の院の「佐久佐女の森」に隠したという。

また、神戸川の支流、須佐川のほとりに、スサノオを祭神とする**須佐神社**(出雲市佐田町須佐)がある。『出雲国風土記』によると、スサノオはこの地に来て開拓をし、「この国は小さい国だがよい国だ」といって自分の「須佐」という名をこの土地の名にしたという。



『出雲国風土記』のなかのスサノオ

(一)意宇郡安来郷

「神須佐乃袁命(スサノオ)が国土の果てまで巡りなさった。そのとき、ここに来なさっておっしゃられたことには、『わたしの心はやすらかになった』とおっしゃられた。だから、安来という」

(二)飯石郡須佐郷

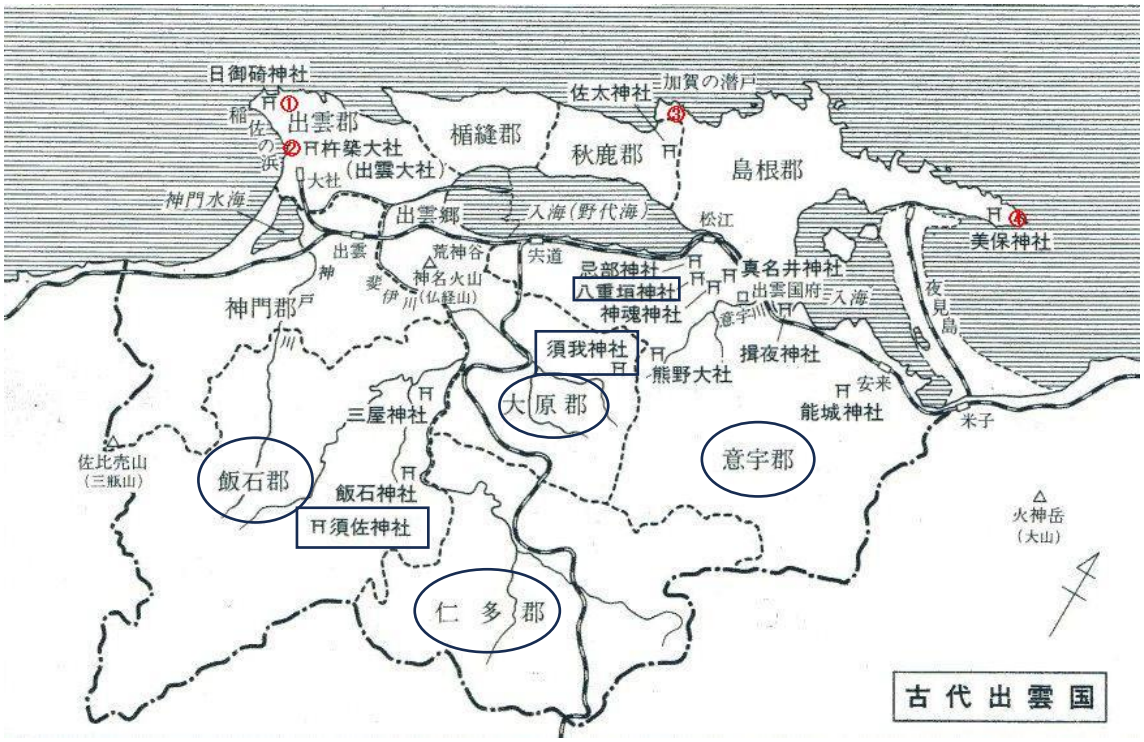
「『この国は小さい国だが国として良いところだ。だから私の名前は木や石にはつけまい』と言ったので自分の御魂をここに鎮め置いた。そして大須佐田(おおすさだ)・小須佐田(おすさだ)を定めたので須佐という」

(三)大原郡佐世郷

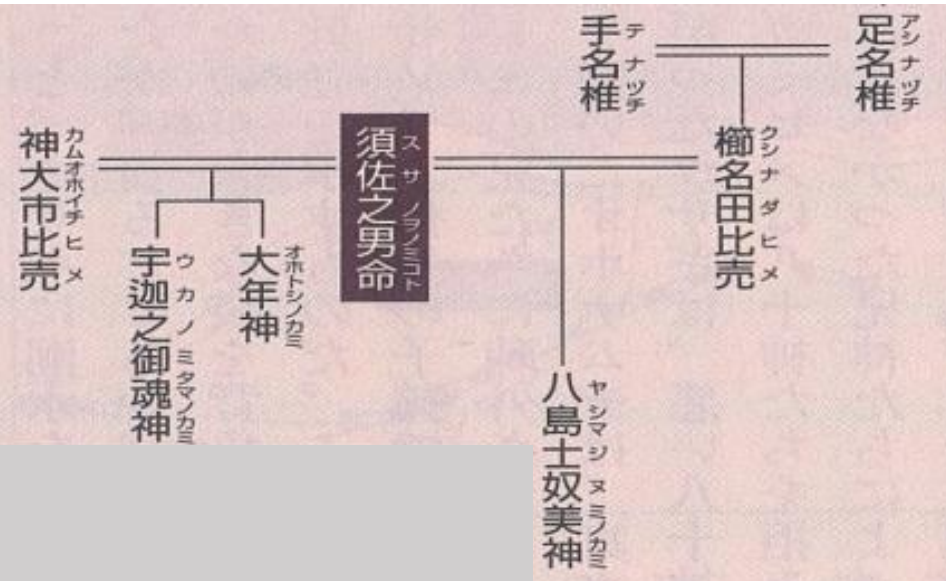
「古老が伝えて言うには、須佐能袁命(スサノオ)が佐世の木の葉を髪飾りにして踊りなったときに刺していた佐世の木の葉が地面に落ちた場所であるので佐世という」

(四)大原郡御室山(みむろやま)

「神須佐乃乎命(スサノオ)が御室(みむろ)を造らせて宿った場所なので御室という」



スサノオの妃たち



(一)クシナダヒメ

『古事記』 では櫛名田比売、『日本書紀』では奇稲田姫・稲田媛・真髪觸奇稲田媛(まかみふるくしいなだひめ)と表記され、『出雲国風土記』では久志伊奈太美等与麻奴良比売命(くしいなだみとよまぬらひめ) と表記される。

(二) 神大市比売(かむおおいちひめ)

『古事記』にのみ登場し、大山津見神の子で、クシナダヒメの次にスサノオの妻となり、大年神(おおとし)と宇迦之御魂神(うかのみたま)の二子を儲けたとされる。

スサノオが九州で儲けた子供

『日本書記』	子	記　　事
第四の一書	五十猛命 (いたける)	・高天原を追放されたスサノオは、息子の五十猛神(いたける)と共に新羅の「曽尸茂梨(ソシモリ)」に天降ったものの、「この地われ居ること欲さず」といって、土の船で東に渡り、出雲国斐伊川上流の「鳥上の峯」に到った後、ヤマタノオロチを退治したと記されている。 ・『古事記』に登場する大屋毘古神(オホヤビコ)と同一視される。
第五の一書	大屋津姫命 (おおやつひめ)	「時に。素戔嗚尊(スサノオ)の子を号(なづ)けて五十猛命と曰(もう)す。妹大屋津(おおやつ)姫命、次に枳津(つまつ)姫命。すべてこの三柱の神、またよく木種を分布(まきほどこ)す。即ち、紀伊国に渡し奉る。然して後に、素戔嗚尊(スサノオ)、熊成峯(くまなりのたけ)に居(ま)しまして、遂に根国(ねのくに)に入りましき」
	枳津姫命 (つまつひめ)	

スサノオが九州から引き連れてきた五十猛命（いたける）・大屋津姫命（おおやつひめ）・柧津姫命（つまつひめ）三人の母親は不明である。

九州生まれであるから、高天原の天孫族の女性であった可能性が大きかろう。

スサノオが出雲で儲けた子供(『古事記』『日本書紀』)

文　献	子	記　　事
『古事記』	・八島士奴美神 （やしまじぬみ） ⇒　清之湯山主三名狭漏彦八嶋篠 （すがのゆやまぬしみなさるひこやしまの）	母はクシナダヒメ
『日本書紀』		・清之繁名坂軽彦八嶋手命 （すがのゆいなさかかるひこやしまで） ・清之湯山主三名狭漏彦八嶋野 （すがのゆやまぬしみなさるひこやしまの）
『日本書紀』本文	大己貴神 （おおなむち）	・『古事記』ではスサノオの六世の孫 ・『日本書紀』一書は七世の孫 ・『日本書紀』本文はスサノオの子

前号でも述べたように大己貴神、すなわち大国主命の系譜は錯綜しているが、スサノオを継承した出雲の大王であったことは確かである。

『古事記』によると、八島士奴美神(やしまじぬみ)は、スサノオとクシナダヒメの子とされている。

『日本書紀』においては、上表のとおり「清之湯山主三名狭漏彦八嶋篠」、「清之繁名坂軽彦八嶋手命」、「清之湯山主三名狭漏彦八嶋野」と表記されている。『古事記』からみて「八嶋」が本体なのであろう。

なお、『先代旧事本紀』は、驚くべきことに、八島士奴美神＝大己貴神(大国主命)としている。

もし、この情報が正しいとすると、大国主命の系譜上の問題はたちどころに氷解してしまうことになるが、『先代旧事本紀』の記事だけを信じていいのかという別の問題が生じる。

『先代旧事本紀』の記事を補強する別の資料がない段階では、うかつに飛びつくわけにはいかない。

慎重を期し、今後の検討課題として後世に委ねるのが最善手であろう。

何か情報をお持ちの方がおられたら、ご一報いただきたい。

『出雲国風土記』に登場するスサノオの子供(五男二女)

『出雲国風土記』	子	『出雲国風土記』の記事
意宇郡大草郷	青幡佐久佐丁壮命 (青幡佐草日古命) (あおはたさくさひこ) 【八重垣神社の社家佐草氏の始祖】	「須佐乃乎命(スサノオ)の御子、青幡佐久佐丁壮命(あおはたさくさひこ)が鎮座していらっしゃる。だから、大草という」
大原郡高麻山		「古老が伝えて言うには、神須佐能袁命(スサノオ)の御子・青幡佐草日古命(あおはたさくさひこ)がこの山の上に麻(あさ)を蒔いたので高麻山という。この山の岑に鎮座しているのはその神の魂である。
島根郡山口郷	都留支日子命 (つるぎひこ)	「須佐能袁命(スサノオ)の御子、都留支日子命(つるぎひこ)が『私が治める山口のところである』と言ったので山口という名を負わせた」
島根郡方結郷 (かたゆい)	国忍別命 (くにおしわけ)	「須佐能袁命(スサノオ)の御子、国忍別命(くにおしわけ)がおっしゃられたことには、『わたしが治める地は形がよい』とおっしゃった。だから、方結(かたゆい)という」
秋鹿郡恵曇郷 (えとも)	磐坂日子命 (いわさかひこ)	「須佐能乎命(スサノオ)の御子、磐坂日子命(いわさかひこ)が国を巡りなさったときに、ここにいらしておっしゃられたことには『ここは国が若く美しいところである。地形は画鞆(えとも)のようである。私の宮はここに造ることにしよう』とおっしゃられた。だから、恵伴という(神亀三年に字を恵曇と改めた)」
秋鹿郡多太郷	衝桙等番留比古命 (つきほことおるひこ)	「須佐能乎命(スサノオ)の御子、衝桙等番留比古命(つきほことおるひこ)が国を巡ったときに『私の心は明るく正しくなった。私はここに鎮座しよう』と言ったので多太という」
神門郡滑狭郷 (なめさ)	和加須世理比売命 (わかすせりひめ)	「須佐能袁命(スサノオ)の御子、和加須世理比売命(スセリビメ)が鎮座していらっしゃった。所造天下大神(大国主命)が娶りてお通いになったときに、その社の前に盤石(いわ)があり、その上がとても滑らかだった。そこで『滑らかな岩である』とおっしゃられた。だから南佐(なめさ)という。(神亀三年に字を滑狭と改めた)」
神門郡八野郷 (やの)	八野若日女命 (やのわかひめ)	「須佐能袁命(スサノオ)の御子、八野若日女命(やのわかひめ)が鎮座していらっしゃった。そのとき所造天下大神・大穴持命が娶りなさろうとして、屋を造らせなさった。だから、八野という」

スセリビメ

上の表のうち、和加須世理比売命（わかすせりひめ）というのは、『古事記』のスセリビメ(須勢理毘売命、須勢理毘売、須世理毘売)のことであろう。スサノオの娘で、大国主命の正妃になった女性である。

『古事記』には、次のように記されている。

スセリビメは父スサノオと根の国に住んでいたが、葦原中国から八十神たちの追跡を逃れるため訪れたオオナムチ（大国主命）と結婚した。

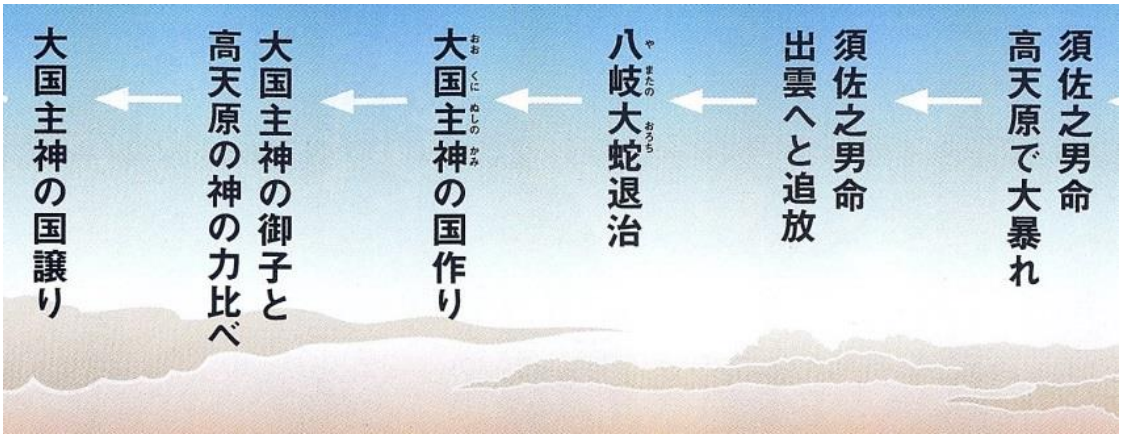
スセリビメが家に帰ってオオナムチを父に紹介したところ、父はオオナムチを蛇のいる部屋や蜂とムカデのいる部屋に寝させた。スセリビメは魔除けの「比礼(ヒレ)をオオナムチに与えて救った。

また、スサノオが頭の虱を取るよう命じ、実際にはムカデがいたのだが、スセリビメは木の実と赤土をオオナムチに与え、ムカデを噛み潰しているように見せかけるよう仕向けた。スサノオは安心して眠ってしまい、その間にオオナムチがスサノオの髪を部屋の柱に縛りつけ、生大刀と生弓矢と天詔琴を持ってスセリビメを背負って逃げ出した。気がついて走り出すもスサノオは追いつけず、オオナムチに大国主神の名を与え、スセリビメを本妻として八十神を平定し、立派な宮殿を建てるよう命じた。

大国主神は先に結婚した八上比売との間に子を得ていたが、八上比売はスセリビメを畏れて木俣神を置いて実家に帰ってしまった。

また、オオナムチが高志国の沼河比売のもとに妻問いに行ったことに対しスセリビメは激しく嫉妬した。困惑したオオナムチは大倭国に逃れようとするが、それを止める歌を贈り、二神は仲睦まじく暮らしたという。

次号においては、大国主命について述べたい。



（以下、次号へつづく）

河村哲夫(かわむら・てつお)

福岡県柳川市生まれ
九州大学法学部卒
歴史作家、日本古代史ネットワーク副会長
福岡県文化団体連合会顧問
ふくおかアジア文化塾代表
立花壱岐研究会会員
元『季刊邪馬台国』編纂委員長
西日本新聞 TNC 文化サークル講師
朝日カルチャーセンター講師
大野城市山城塾講師

〈おもな著作〉

『志は、天下～柳川藩最後の家老・立花壱岐～(全 5 巻)』(1995 年海鳥社)
「小楠と立花壱岐」(1998 年『横井小楠のすべて』(新人物往来社)
『立花宗茂』(1999 年、西日本新聞社)
『柳川城炎上～立花壱岐・もうひとつの維新史～』(1999 年角川書店)
『西日本古代紀行～神功皇后風土記～』(2001 年西日本新聞社)
『筑後争乱記～蒲池一族の興亡～』(2003 年海鳥社)
『九州を制覇した大王～景行天皇巡幸記～』(2006年海鳥社)
『天を翔けた男～西海の豪商・石本平兵衛～』(2007年 11 月梓書院)
「北部九州における神功皇后伝承」(2008 年、『季刊邪馬台国』97 号、98 号)
「九州における景行天皇伝承」(2008 年、『季刊邪馬台国』99 号)
「『季刊邪馬台国』100 号への軌跡」(2008 年、『季刊邪馬台国』100 号)
「小楠と立花壱岐」(2009 年 11 月、『別冊環・横井小楠』藤原書店)
『龍王の海～国姓爺・鄭成功～』(2010 年 3 月海鳥社)
「小楠の後継者、立花壱岐」(2011 年 1 月、『環』藤原書店)
『天草の豪商石本平兵衛』(2012 年 8 月藤原書店)
『神功皇后の謎を解く～伝承地探訪録～』(2013 年 12 月原書房)
『景行天皇と日本武尊～列島を制覇した大王～』(2014 年 6 月原書房)
『法顕の旅・ブッダへの道』(2012～2016 年『季刊邪馬台国』114 号～124 号に連載)
『日本古代通史』(2020 年 12 月から季刊「古代史ネット」で連載中)

(テレビ・ラジオ出演)

平成 31 年 1 月 NHK「日本人のおなまえっ！　金栗の由来・ルーツ」
平成 28 年より RKB ラジオ「古代の福岡を歩く」レギュラー出演